月の昇る夜

昂綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の昇る夜

【Ｎコード】
Ｎ６５０１Ｔ

【作者名】
昂綺羅

【あらすじ】
月影町、通称『太陽の昇らない町』。
そこには、そこでしか生きていない男がいた。　男が今回請け負う仕事は『狩り』

（前書き）

なんか前よりはマシになってる気がする。
そんな気がするから、自分では読み返しません。
現実なんて直視しない！

月が昇る夜の日、今日もまた満月。
「相変わらずおかしな所」
後ろから声がかかる。
「太陽はいつ昇るのかしら？」
「……あぁ、君か」
「久しぶりね、と言う程は久しぶりでもないかしら？」
「3か月ぶりなら、久しぶりでいいんじゃないか？」
「そう……じゃあ、お久しぶり。ジャン」
そう言って女性はジャンの横に並んだ。
「どうした、また何かあったのか？」
「いいえ。ただ、あまりにもここが居心地が良くってね。また戻ってきちゃったわ」
「ふん。嘘はばれない様につくものだ。或いは嘘など言わない方が身のためだ」
「相変わらず、無愛想ねぇ。去年、成人したばかりのくせに」
「職業柄、愛想を振りまく必要がないからな。交渉はあいつの仕事だ」
「ま、いいけどね。あなたにやってもらいたい事なんて限られてくるんだから、言わなくても分かるでしょ？」
「あぁ。しかし俺はこの町でしか生きていない者だ。対象をこの町に連れてくるのはお前の役割だぞ」
「結構。それじゃ、詳しいデータはパソコンに送っておいたから後で確認してね」
「了解。以後、連絡は月が昇るたびにこの丘で」
「それじゃ、月が昇る時にもう一度」
女性は立ち去ろうとしてもう一度振り返る。
「あ、言い忘れてたけど今回、私のコードネームは『ゼロ』だから」

言うとゼロは夜に消えて行った。

「おかえりー」
「ただいま」
玄関には眼鏡の女性が立っている。
「いい加減、勝手に家に上がるは止めておけ。ストーカーと変わらんぞ」
「今日も2回、泥棒さんがこの家に来たんだよ。狙われやすい家なんだから、番犬の1匹くらいいた方がいいじゃない」
「……まぁ、いいか。で、何が食べたい？」
「あなたが作ってくれるなら何でも」
そうするとリビングが目に入る。
「これは、食事より片づけが先か」
「さすがに死体の処理は専門外で。下手に素人が処理するよりは、あなたを待った方がいいかと」
「それにしても、もう少しきれいに殺せないのか？　これは汚すぎる」
「無理だよ。私の能力上、どうしても血が飛び散るのは、避けられない避けられない」
ジャンはリビングの片づけを開始した。
「罰としてお前が今日は飯を作れ」
「えー、だって勝手に忍び込んだ奴をぶちのめして、褒められこそすれ罰を与えられるなんて聞いてない」
「うるさい、嫌なら橋の下の実家に帰れ」
そんな事を言いながら買ったばかりのソファーに付いた血を落とすジャン。
「うぅ、それを言われると……」
ホームレスである由姫(ゆめ)はしぶしぶ料理を承諾する。
「その代わり、変な物が出てきても知らないからね」
「三つ星レストランで働いてたお前がか」

ジャンは死体の梱包に移る。

「ふぅ」

血の跡がひとつ残らず消えたリビングには、食事の後の食器が残っていた。

「美味しかった？」

「あぁ、特にあの緑の奴が美味かった」

ジャンの横で由姫は満足そうに笑っている。

「作るの面倒くさいけど、喜んでもらえたんなら嬉しいな」

そんな事を言う由姫を見て、『こうしてれば普通の娘なのになぁ』と思いながら席を立つジャン。

「仕事の準備があるからこれでな」

「お、久し振りの仕事？　半月ぶりくらいだね」

「あぁ、そうだっけ」

言いながら思いたったように考えるジャン。

「おい、由姫。お前しばらくここに居ろ」

「え？」

頬を紅潮させる由姫。

「な、何で？　ひょっとしてプ、プロ、ぷろぷろ、プロポ……」

「あー、いや、そうじゃなくてだな。近いうちに『狩り』をするから、たぶん危ない」

狩り、それはジャンが受けるいくつかの仕事の中の一種だった。

「狩り？」

とたん、顔が真剣になる由姫。

「ふーん、てことは依頼主はまたあのお嬢様かな？　まったく、人が死ぬのが最高のエンターテイメントなんて最低な奴よね」

「まぁ、そう言うな。その最低な奴のおかげで飯にありつけるんだ」

「そうだけど。でもなぁ」

納得のいかないらしい由姫は頬を膨らませる。

「まぁ、とにかく暫くは実家に戻らずここで暮せ。必要な物があれ

ば買って来てやるから」
「えらく優しいね。怖いくらい」
由姫は、気味が悪いと言わんばかりのしぐさを付けて言い放つ。
「ま、3年も付き合ってれば愛着の1つもわく」
「ふーん」

月が沈み、あたり一面は普段の2割増し程暗くなる。
町から少し離れた丘は暗黒と言わんばかりの暗さだった。
「まーた、昼には月灯りがないんだから懐中電灯の1つくらいは持ち歩こうぜ、旦那」
「その声は、春樹か？　夏樹か？」
「2人とも居るよ」
最初の声と同じ声でささやかれたが、2人いると言うので2人いるらしい。
「で、仕事の依頼が来てるけどどうする？」
「今は、別の依頼を受けてるからな。また今度にしとこう」
「へぇー、旦那が自分で依頼受けるなんて珍しい。こりゃ明日は雨かな」
「この町には雨は降らないさ」
「ま、そりゃそうだ」
笑い声は聞こえるが、ジャンは相変わらずその存在を感じる事は出来なかった。
「で、何の依頼を受けたの？」
「『こっち世界じゃ、好奇心の強い奴は早死にする』、何て言った奴が誰か知ってるか？」
「おぉ、怖いねぇ。仕事にプライド持ってる訳じゃないだろうに」
「……この商売にプライド持ってる奴こそいないだろう」
「良く分かってるねぇ。さすが、この商売で食ってるプロは言う事が違う。
最近の若いのはそこら辺を理解してなくてどうにも信用できない。

それに比べて旦那は安心して仕事を任せられるよ」
「だから、今回はパスだって言ってるだろ？　プライドはなくても、契約不履行じゃ商売にならん」
「くくく、そうに違いねぇ。それじゃ俺は帰るからあのお嬢さんには次からは俺を通すように言ってくれ。旦那を当てにしてるからこういうニアミスは避けてぇんでな」
　相変わらず存在を感じられないままのジャンだったが、帰ると言ったので帰ったのだろう。
「やっぱり、誰が依頼人か知ってたんじゃないか」

「ごきげんよう、早いのねジャン」
「お前の方こそ、月が出るまでには1時間ほどあるが？」
　あたりはまだ暗く、ゼロの『光』がなければ何も見えないほどだった。
「お屋敷って退屈なの。まだこっちの町の方がましだわ」
　ゼロは溜息を織り交ぜながら語る。
「そもそも、お屋敷で退屈してなければあなたに『狩り』を頼みにも来ないわ」
「たまには自分で狩ってみたらどうだ。能力がない訳じゃないだろう？」
「いやよ。安全圏からの傍観が楽しんじゃない」
「まぁ、そうだろうな」
「それで、データは見た？」
「見たが、あれはなんだ？　顔と名前くらいしか分からなかったが」
「そうよ、全部分かってたら面白くないじゃない。これは単なる暗殺じゃなくてエンターテイメントなんだから」
　ゼロは可笑しくてたまらないらしく、声こそあげなかったが可笑しそうに笑っていた。
「後、数時間でこの町に獲物を転送する用意ができるわ。
　開始は、そうね。次の昼に開始にしましょう。で、夜までに狩れ

るかしら」
「お望みとあらば」
「なら決まりね。私はここから『見てる』から、なるべく面白く殺してね」
「大通りで大体的に殺せる訳じゃないからな。まぁ、希望に添えるように善処しよう」
「楽しみにしてるわ」
言うだけ言うと、ゼロはいつものように帰って行った。

「痛ってぇ。あのクソタキシード、いきなり転送しやがって。しかも夜ってことは海外かよ」
まだ月の昇っていない町の売地に突如として現れた少年は愚痴を垂れながら五体満足を確認する。
「ようこそ、月影町（つきかげちょう）、通称『太陽の昇らない町』へ」
ジャンが声をかけると少年は警戒心をジャンに向ける。
「説明ありがとう。オタク、あのクソタキシードと知り合い？」
「いや、そいつは知らないが、たぶんそいつの上司と知り合いだ」
「ふーん」
少年はポケットに手を突っ込んだ。
「説明はどの位受けてる？」
「ぜんぜん、いきなしクソタキシードに捕まって気付いたらここにいた」
「なら、ルール説明だ。君は月が昇って夜になるまで生き延びればいい。そうすれば君の勝ちだ」
「月が昇るまで？　それじゃ、明日の夜まで１日もやんのか」
「いや、今日の夜になれば月が昇る。分かりづらいが今は１５時だ。」
「……なるほど、だから『太陽の昇らない町』ね」
「理解が早いのは助かる。で、死んだら君の負け。後は、無理だとは思うがこの町から出ても君の負けだ。一応このゲームの主催者が

北にある丘から『見てる』から、逃げたらそのタキシードが殺しに来るんじゃないか？　ちなみにこれはその主催者のためのゲームだから文句は主催者に言ってくれ。
以上、質問は？」
「あー、これは俺が殺されたら負けなゲームな訳な」
「あぁ」
「じゃあ、俺があんた殺したらどうなるの？」
「……お前の勝ちになるな」
ジャンは嬉しそうにほほ笑みながら言う。
「オタク、何で笑ってんの？」
「いや、なに。今までこのゲームで俺に向かってくる奴がいなかったからな、いい加減追うだけなのは飽きてたんだ。そうか、俺と戦うか」
「なんかむかつくなぁ。マジで殺すよ？」
少年はポケットから取り出したリボルバーをジャンに向ける。
「それじゃ、順序がおかしくなったが最終確認だ」
ジャンは音の響かないリボルバーの弾を避けながら叫ぶ。
「お前が嗣（よつぎ）　橙（だいだい）で間違いないな？！」
「そうだよ！　それで間違いない」
言いながら撃つリボルバーは明らかに６連装だがもうすでに３０連発は撃っていた。
「なるほど、一応魔術関係者。『無限弾奏』の拳銃か……」
「あったりー、面白いでしょ」
しかしそれを全て回避しながらジャンは喋っていた。
「オタクも魔術関係者？　えらく身体能力が高いみたいだけど」
橙は右手をポケットに入れると、今度はオートマチックを取りだした。
「あぁ、答えなくてもいいよ」
そう言って撃ったオートマチックはおおよそ拳銃とは思えない、どちらかと言えばガトリングガンのような音を立てて連射された。

「ふんっ」
息を吐き、ジャンが手を振ると弾は全て逸れていった。
「あ、オタクやるねぇ。今ので決めるつもりだったのに」
右手に持たれていたオートマチックが消えた。
「弾切れだが、ここで諦めて死ぬか？」
「たかが弾切れで？」
橙は笑いながら背中に手をやる。
「あぁ、これはもう要らないからやるよ」
橙は左手のリボルバーを投げると同時に、背中から抜いた日本刀を持ってジャンに突っ込んだ。
「うぉラ！」
「ふんっ！」
日本刀に触れたジャンの手の皮が激しく裂けた。
「それも魔術性の武器か……」
「ははは、『絶対切断』を受けてその程度って……なるほど、かなりのやり手だね」
橙の左手は今度は太ももの辺りに伸びる。
「でも、まだまだいくらでも武器はあるからさ。いつまで耐えれるかな？」
橙はズボンに隠していたナイフ投げつけた。

「まぁまぁ、とても愉快だわ。あの子、ジャン相手に善戦してるわ」
町から数キロ離れた丘で、ゼロは戦いを『見て』いた
「でも、ジャンには勝てなんでしょうね。そうは思わない？　神威さん」
呼ばれて森の中から男が姿を現した。
「ジャンにも気付かれた事がないんだが……不可思議だ」
「相変わらず気配はないみたいだけど、姿が『見え』てればそんなの関係ないわ」
「見る、ねぇ」

「あら、秋香さん。久しぶりね」
「そう言えば、そういう能力だったね」
「冬香さんまで、神威家勢ぞろいじゃない。どうしたの？　夏樹君」
そこに居るのは一人の男の筈だが、確実に４人の人間がいた。
「いや、なぁに。契約不履行のお嬢さん相手に喧嘩売りに来ただけだよ」
「契約不履行？」
「そうだ、今後一切この町に関わらない。その条件で３か月前に狩りを許した。違うか？」
「そうね、そんな約束だったけど……」
ゼロの顔が歪んだ笑顔を描き出す。
「守る訳ないじゃない。こんなに面白い物、一回きりなんてもったいない」
「みんなその条件で、人生に一回きりって条件でこの町を貸してんだ。お前だけ特別って訳にはいかないな、お譲さん」
「いかなければ、どうするの？」
「死んでもらう」
「嫌よ」
そう言うと、夏樹の腹に光の剣が突き刺さる。
「グふっ」
「あなた一人じゃ私は殺せないわ」
「まぁ、そうだろうな」
春樹が剣を抜くと、そこには傷一つなくなっていた。
「それを見るのも久しぶりねぇ。相変わらず『存在が希薄』な方です事」
「まぁね、そのために４人で来たんだし」
春樹は飄々と応える。
「それと、僕たちはお話をする担当でさ。実行は他人任せなんだよね」
「？」

ゼロは体に違和感を覚えていた。
「お、もい」
「あぁ、いい仕事をするね。由姫さん」
「御褒めに頂き光栄ね。でも、名前で呼ばないでくれる？　気色悪いのよ、あなた」
由姫が闇から現れる。
「あなたは」
「三か月ぶりかしら？　あの時はお世話になりました。あなたが付けてくれた傷はもう綺麗に治ってるから気にしないで」
言いながら由姫はニヤつく。
「気にせず死んでね」
ゼロの体がどんどん重くなっていく。
「じゅう、力……？」
「ぶっぶー！」
すると、今度はゼロの体が浮き上がった。
「重力操作魔術風味のサイコキシネスでした！」
ゼロの体はぐちゃぐちゃに弾け飛んだ。
「きったねぇな！」
秋香は叫んだ。
「下品でしょうがないね」
冬香は呟く。
「我慢しろ。これも仕事だ」
夏樹は2人をなだめた。
「いやいや、いい仕事だよ。さすがだね、『紅の王女（クリムゾン・プリンセス）』」
由姫は不満たっぷりの顔で帰っていく。
「お金はいつもの所にお願いね」
「わかった。それじゃ、縁があればまた夜に」
「縁がない事を祈っておくわ」
神威兄弟は笑いながら由姫を見送る。
「俺たちも帰るぞ」

この時、誰も何も言わなかった。ゼロの死体が消え失せている事を。

「はぁ、はぁ、ふー」
「ラマーズ法か？」
「あってるか知らないけどね」
ジャンと橙の足元にはすでに莫大な数の武器が散らかって、既に武器の上に立っていた。
「その上着も、魔術性武器か」
「気付いた？　まぁ気付くか。これは『高速読込』。まぁ、能力は言わずもがな分かるよね」
橙は不敵に笑う。
「こういう物さ！」
上着から手裏剣を投げつける。
「ふんっ！」
手裏剣はジャンの手の甲に刺さる。
「どうしたの？　いい加減限界かな？」
「それは困るわ」
突然、橙の腹に光の剣が現れる。
「ジャン、狩りのターゲットを変更するわ。標的は神威兄弟。これはこっちで処理しておくから」
ゼロは剣を引き抜きながら告げる。
「……了解した」
ジャンは、地面に落ちていた剣を拾い上げゼロの横を通り過ぎる。
「期待してるわよ、ジャン」
「あぁ、任せろ」

ザクッ

「え？」
鉄でできた剣はゼロの心臓を貫いた。
「契約不履行だ」
そう言って引き抜くともう一度、今度は頭に刺す。
「3か月前に言ったはずだ。『狩りの途中に現場に入って来るな』と」
「そ……んな」
「その様子では本物の様だな。手間が省けて助かる」
ゼロはその場に倒れた。
「はぁ、はぁ、ふー」
足元からはラマーズ法の呼吸が聞こえてきた。
「さて、君は私の敵ではなくなった。助けてほしければ助けよう。ただし依頼扱いで報酬は貰うが」
「ひゅー、ひゅー、……そ、それで構わない」
「了解した。それでは報酬として、この私が汚してしまった剣をもらっておこう」
ジャンは傷の手当てに入った。

月が昇る夜の日、今日もまた満月。
「初めて自分で受けた依頼はどうだった？」
「最悪だ、契約不履行で収入はゼロ。由姫に食わせてもらう事になるとは」
「あの女のコードネームはこの事を指してたのかもしれない。そうは思わないか、旦那」
「うまくない。話をするのがお前の仕事だろうに」
「芸人ではないんでね」
ジャンは、相変わらず気配は感じ取れないものの、春樹がニヤけ

ているのが分かった。
「旦那も、戦闘ならともかく総合面ではまだまだ半人前だね」
「あぁ、今回お前のすごさが分かったよ」
「それは恐悦至極」
雲ひとつない空を見上げると、今度は１０歳代の女性が入ってきた。
「旦那、俺の持ってきた仕事、受けてくれる？」
どこからか響く声に女性はびくびくしていた。
「ようこそ、月影町、通称太陽の昇らない町へ」
ジャンはつまらなそうに女性に声をかけた。

（後書き）

これを読んでくださったら、アドヴァイス、暴言（はダメ）、感想、などを書いてください。

書いてくれると嬉しいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6501t/

月の昇る夜

2011年5月29日18時40分発行